

# 承認と他人指向

樋口 善郎

## はじめに

承認という働きには戦いという要因がつきまといっているように見える。そのことは、素朴に考えるだけで明らかになる。戦いや競争に勝利した者こそが栄冠を手に入れるし、高い評価が彼に寄せられるからである。これをその人の価値を「認める」と言わずして何であろう。これは、思想史から見てみても、確証できるように思う。たとえば、高い評価の与えられる人間の属性を表現するのに用いられる「徳」は、古代ギリシアではアレテー *aretē* という言葉で表されるが、この語の成り立ちはもともと、アレース *arēs* という戦いの神に由来することからも分かるように<sup>1</sup>、「武勇にすぐれていること」にある。ホメロスが描いたトロイア戦争の英雄 (*hērōs*) たちは、武勇の点で、あるいは、それに関わる諸能力の点ですぐれた者と賞賛される<sup>2</sup>。武勇に卓越していることが彼らの本質的な属性であり、英雄である以上なくてはならないものであった。また、名誉・名声こそが彼らの本質的な目的であり、彼らの生命はこれに捧げられたのである<sup>3</sup>。このことは、ソクラテスにおいて劇的に変化する。彼は徳を「魂のすぐれていること」に帰着させ、名誉・名声を二次的な善とみなしたとされるからである<sup>4</sup>。しかし、彼以後にも先の痕跡はそこかしこに見え隠れする。プラトンにおいては、魂の中の「気概の部分」は、名誉・名声を愛する部分であり、国家の三階級の中では戦士階級に相当する<sup>5</sup>。アリストテレスの場合でも、「矜持」ある人は、生きることに執着しないで、「うるわしくて実りなきもの」、すなわち名誉を所有したがるたちの人物だと描かれるように、戦いのニュアンスを残している。近代になると、ホップズの「万人の万人に対する戦い」もヘーゲルの「承認をめぐる戦い」も戦いを絡めて承認の問題を考えている<sup>6</sup>。このように、素朴に考えても、思想史から見ても、承認と戦いとは、双子の兄弟 (*dioskouroi*) のように緊密な関係にあるように見える。

ところで、最近の若者は「承認願望」が強い、という指摘が一部の専門家にはある<sup>7</sup>。しかし、認められたいという欲求は今の若者にかぎったものではない。それは古くは、ホメロスの英雄たちの場合に見られるように、何らかの戦いにおける名誉・名声への欲求のような形で存在したと考えられる。そして、賞賛をあびたいという欲求は老若男女いずれにおいても普遍的に存在するといっても過言ではない<sup>8</sup>。では、今日の若者たちは再び、何らかの戦いの中で自らの能力を誇示し、承認を得たいとしているのだろうか。それとも、今日強く希求されている承認は、なにか別の特殊なタイプの承認なのだろうか。承認の様相になにか変化が起こってきているのだとすれば、そもそも承認にはいくつかのヴァリエーションがあるのだろうか。承認の変化とともに、戦いもまた変質したのだろうか。小論は、このような問題意識から承認の原理的な部分に再び光をあてようとする試みである<sup>9</sup>。

承認のさまざまな様相、それを取り出すために、歴史的な視点を取り込むことにしてみたい。小論が手がかりにしようとするのは、アメリカの社会学者リースマンの著書『孤独な群衆』<sup>10</sup>である。彼はそこで、人間の文明の流れを三区分し、「社会的性格social character」の三つの理念型を取り出している。彼の分析はそのまま承認の問題に直結すると思われる。それは、第三段階の社会的性格が「他人指向型」と名付けられていることからしても、容易に見て取ることができよう。しかし、他の段階でも他者との関わりは重要な問題である。そこで、小論は、この作品を「承認論」の視点から読み直すことにしたい。『孤独な群衆』の歴史的な視点を借りることで、いわば「承認の歴史哲学」を展開することができるであろう。

## 1 文明の三段階と社会的性格

リースマンによれば、人間の文明の流れは人口統計学（demography）の成果を用いて三区分することができる。すなわち、(1) 高度成長潜在的high growth potentialの段階、(2) 過渡的成長transitional growthの段階、(3) 初期的人口減退incipient population declineの段階である。それぞれについて簡単に見てみよう。(1) たとえば、西欧の近代以前の社会は、人口が増加しない、あるいは、増加率が低い状態にあり、そこでは、出生率が死亡率にほぼ等しく、いずれの数字も大きい。このような段階の社会は、寿命も短く、社会の大部分は若い人たちに占められ、世代交代のスピードも速い。(2) しかし、食糧の増

加、新しい保健設備、医療の進歩、交通通信の改良（これによって食糧の余剰地域から不足地域へ輸送が可能になる）、嬰兒殺しの減少などの要因によって高い死亡率が低下するだけで、人口の高度成長が一気に顕在化し、「人口爆発」が起こる。たとえば、西欧社会では十七世紀以降に、西欧化された他の地域でも十九世紀にはこういう事態が発生したとされる。(3) しかし、この成長も永続的ではなく、死亡率の低下とともに出生率が低下しはじめると、人口の成長率は再び低くなる。そして、社会の大部分を中高年が占めるような社会（いわゆる高齢化社会）が出現してくる。今日の日本社会も急激にこの段階に踏み込みつつある<sup>11</sup>。

さて、リースマンは以上のように文明の流れを人口曲線の三局面から三段階に区分した上で、それぞれに対応する社会的性格を論じる。社会的性格とは「性格のなかの一部で、重要な社会諸集団に共通であり、かつ（中略）それらの諸集団の経験からうまれたもの」のことであり、「さまざまな階級、集団、地域、国家の性格」のことである（LC.4）。また、「同調性の様式mode of conformity」（LC.6）とも言い換えられる。では、彼は、三段階に対応する社会的性格をどのように論ずるのだろうか。まず、その三つをあげておくと、(1)「高度成長潜在的」な社会は「伝統指向tradition-directionに依存する社会」、(2)「過渡的人口成長期」の社会は「内部指向inner-directionに依存する社会」、(3)「初期的人口減退」の社会は「他人指向other-directionに依存する社会」である<sup>12</sup>。これら三つの社会的性格はどのようなものだろうか。それぞれについて、(a) その社会の特徴、(b) その性格の特徴、(c) 社会と性格とをつなぐ性格形成の要因、という論点からリースマンの議論をまとめておこう。

(1) 伝統指向型は、高度成長潜在的な社会、第一次部門の産業が中心の社会に支配的な社会的性格である。(1-a) この社会は、慣習と社会構造が強力であり、比較的変動がなく、変化のスピードも遅く、家族や血縁集団への依存度が高く、安定性をもつ。価値体系も固定している。年齢が高い者は尊敬され、家柄も重視されるのである。(1-b) このような社会に生まれた個人は、社会への「適応」を余儀なくされる。個人は、自分を取りまく集団の行動様式に同調しようとするのである。それは、エチケット、経済的作業、儀礼、日常的慣習、宗教にまで及ぶ。それは「伝統に対する服従」と言い換えることもできる。しかし、そうした伝統的な行動様式を身につければ、それで十分であって、個性的である必要はない。人生の目標を選択する幅もさほど広くない。いったんこの社会に組み込まれると、その大部分のメンバーは、社会的諸制度と自分とのあいだに調和

を感じるのである。(1-c) この社会での性格形成の主要な要因は、「大家族、およびそれを取りまく部族、ないし集団」(LC.40)である。子供たちは大人たちを「模倣する」(LC.39)ことでその社会に適応していく。それ以外にも、この社会は、そのさまざまな価値の統一をはかるために「口頭伝承、神話、伝説、歌謡」(LC.85)を使用する。そこで語られる物語は、「その文化の中でどのような人間になるべきであるか」(LC.86)というような理想像を示すという規範的な機能を果たす。

(2) 内部指向型は、過渡的成長の社会、第二次部門である工業が中心の社会に支配的な社会的性格である。(2-a) この社会では、血縁的なきずなが弱まる。人と物資の流動性は増大し、技術的進歩とともに生産の拡大、資本の急速な蓄積がなされる。(2-b) このような社会では個人は、明確な伝統によらずに生きていくことができなければならない。人々はみなこの社会においてなにかはっきりした目標（名声や善、仕事の獲得、戦争の勝利、橋の建設など）に向かって努力しており、それぞれ、自分たちが競争しているという意識をもっている（LC.101 を参照）。そして、その冷酷な競争に勝たなければならないと思っている。そのとき競争の原動力になるのは、もはや外なる伝統ではなく、個人の「内部」に発するものである。しかし、この原動力はそもそも個人の内部に由来するのではなく、幼年期における個人の性格形成の際に外から植え付けられたものとされる。このような幼年期の方向付けは、内面化され、「心理的ジャイロスコープ」(LC.16)となる。このジャイロスコープのもとで人は、以前の社会より格段に選択の幅が広がった人生の諸目標の中から自分の生き方を自由に選択し、「ad astra per astra」(LC.115)ということわざのごとく、困難を乗り越えながら、はるか彼方に輝く星たる目標を目指して自分の全生涯をかけて働き続けるのである。このような社会的性格は、お互い切磋琢磨して競争し戦うということもあって、孤独であり、禁欲的（仕事とレジャーとの峻別）でもある<sup>13</sup>。(2-c) このような性格形成において大きな役割を果たす主な要因は、幼年期の家庭内における両親の厳しい「しつけ」であるが、学校の教師やいろいろな印刷物（偉人伝のような伝記、教養小説、大河小説など）もそれに代わる役割を果たしうる。しかし、それらはあくまで「年長の世代」(LC.31)に属し、「同じ年齢層・社会層の仲間集団」を意味する同輩集団（peer-group）のような同時代人が大きな役割を果たすことはない。

(3) 他人指向型は、初期人口減退の段階の社会、第三次部門が産業の中心の社会に支配的な社会的性格である。(3-a) この社会では、物を相手にした製造業に従事する人は

少なくなり、多くが他人を相手にするサービス業などに従事する。労働時間の減少とともに、レジャーの時間も増え、教育水準は高くなり、物質的に豊かな生活を享受するようになる。この物質生活の豊かさとともに、言葉やイメージの消費も拡大する。マスメディアの発達である。(3-b) このような社会では個人は、これまで以上に「ひらけた socialized」(LC.21) 行動を身につけなければならなくなる。したがって、この社会的性格の特徴は、「個人の方向づけを決定するのが同時代人」(LC.21) という点にある。「同時代人」という言葉のもとで考えられているのは、同輩集団のような「直接の知り合い」、または「友人やマスコミを通じて間接的に知っている人物」である。彼は、一定の目標をあやまたず目指すジャイロスコープではなく、同時代人の心の動きを敏感にとらえる「レーダー」(LC.25) を具えている。したがって、彼の目指す目標は、同時代人の導くがままに変化する。彼は「孤独であることを恐がり」(LC.158)、同時代人の意見に耳を傾け、マスメディア(映画、ラジオ、漫画、そしてテレビ)にも耳を傾けるのである。また、彼はもはや仕事とレジャーとの間を区別しないし、経済的には「浪費的」(LC.19) である。(3-c) このような性格が形成されるにあたっての大きな要因は、もちろん、親たちであるが、彼らはもはや、自信にあふれて子育てをする親たちではない。どのようにして子供を育てたらいいかに関して確たる自信を失っているような者たちなのである。彼らは子供たちの社会生活に気をつかう。「親の日課というのは、今日の社会で大事なものとされている才能、とりわけ友達と仲良くやってゆく才能を開発するための努力なのである」(LC.71)。

以上、三つの社会的性格についてリースマンの議論を整理してみたが、これらの三つの性格は人口曲線の局面において、その支配するタイプが変遷する。しかし同時に、「理念型」(LC.8)と言われるように、その純血種が現実存在するわけではなく、常にこれら三つの社会的性格がまじりあった形でしか存在しえない。つまり、どんな時代の誰にでもこれら三つの社会的性格が具わっているのであって、問題はその程度の如何ということになる。では、これら三つの社会的性格は承認の問題とどのような関係にあるのだろうか。それについて次に見てみよう。

## 2 社会的性格と承認

この章では、社会的性格と承認との関係を見てみることにする。それぞれの社会的性

格について、(d) その社会での承認の様態、(e) 承認の規準、(f) 承認がうまくなされない場合に感じる意識や感情、という論点からリースマンの議論を整理してみよう。

(1) (1-d) 伝統指向型に依存する社会では、みなが伝統に服従する方向にあるため、承認は問題にならないように見える。しかし、承認が社会構造のなかに織り込まれているから承認の働きが見えなくなっているのである。「無言の承認」(LC.33)である。この社会では各人は、他者に対して「明確な機能的関係」(LC.11)を有している限りにおいて、集団に所属しており、みな社会の成員として認められているのである。逸脱者にも社会に即した役割(シャーマン、魔法使い、あるいは僧侶)を割り振り、社会に対する機能的関係の内に取り込もうとする。また、競争社会ではないから、親は子供たちに自分たちの役割を相続するように訓練するだけであり、社会的地位を高め成功するように子供に期待するということもない。そして、だれもが年齢を重ねていけば知恵者あるいは伝統の継承者として次第に尊敬を集め、高く評価されるようになる。従って、(1-e) 伝統指向に依存する社会での承認の規準は、みながそつなく無難に自分に与えられている役割をこなすことである。(1-f) この社会では「行動を律するものは<恥をかく>ことへの恐れ」(LC.24)であると言われる。

(2) (2-d) 内部指向型に依存する社会の場合、幼年期に家庭において内面に植え付けられたジャイロスコープは、「高度の安定性」(LC.24)を有しており、独立性が高い。したがって、目標をめざす競争に一定の成果を得たとき、賞賛のような社会的承認によってその行動が強化されることはあっても、かならず他者からの高い評価を受ける必要があるかという、そうではない。むしろ内部指向型の人間の場合は、承認の問題も、彼の内部において生じてくる。彼は、自分の内部に内面化された尺度をもっている。その尺度によって自分自身の振る舞いを常に吟味している。その尺度は、フロイトの「監視的な超自我」(LC.44)のごとく機能する。彼は、自分に厳しく、目標を目指してつねに自分をしっかりさせなければならぬと自己批判的に考え続けている。従って、「いくら同時代人から賞賛されようと、自分は不完全だと彼は感じるだろう。じっさい、他人から賞賛の言葉をあびせられたとしても、それは彼が自分自身を満足させようとする努力の副産物であるにすぎない」(LC.124)のである。しかし他方で、彼は他人の前で失敗しても別に「気にしない」(LC.125)。それは、自分自身の価値について自分で内面的な判断をくだすことができるからであり、他人の批判はさほど影響を与えないからである。自己批判は厳しいものの、逆に、同じ自己批判が他者から自分を守ってくれるので

ある。しかし、さすがに何度もくりかえし失敗すると、やがて自分を軽蔑するようになる。従って、(2-e) 承認の規準は、幼年期に家庭によって与えられた行為の原則がそのまま内面化したものである。他方、(2-f)「自分の内的な衝動だの、同時代人の気まぐれな意見だのによって、コースを踏み外すことは<罪>の感覚を呼び起こす」(LC.24)と言われる。

(3) (3-d) 他人指向型に依存する社会の場合には、「他の人々の承認と指導をもとめるということ」がこの社会に特徴的なこととされ、「人が自分をどう見ているかをこんなにも気にした時代はかつてなかった」(LC.22)と批評される。この社会を特徴づけるのは、「承認ということへのはげしい心理的欲求」(LC.22)なのである。いま「他の人々」と言われたのは、同時代人、とりわけ同輩集団のことである。仲間同士の間の承認が問題となるのである。では、(3-e) どのような規準で認めるのだろうか。他人指向型に依存する社会では、卓越した能力を発揮することは逆に目立ちすぎて危険である。そこで規準として働くのは、「限界の特殊化marginal differentiation」(LC.46)と名付けられているものである。それは、現代の消費社会において製品のちょっとした違いが消費者を惹きつけるのに似ている。機能的なちがいで製品の善し悪しが決められるのではなく、スタイルやデザインの微妙なちがいが重要なのである<sup>14</sup>。これと同じく他人指向型における同輩集団の承認の場合もなにか絶対的な規準があるわけではなく、一種きまぐれな「趣味」(LC.72)の問題である。そして、「他人から認められることがその内容とはかわりなしにほとんど絶対的に善となる」(LC.48)のである。従って、なにかある規準を身につければそれで承認されるわけではなく、仲間たちがどのような好みをもっているか、また他者が自分をどうみているか、それを探知するレーダーを常にはたらかせていなければならない。(3-f)「罪と恥によるコントロールも、もちろん残存しているけれども、それらとは全く別に、他人指向型の人間のもっている一番重要な心理的レバーは、不定的な<不安>だ」(LC.25)と言われる。

以上、リースマンの議論を見てきたが、これら三タイプの承認も、それぞれの社会的性格が人口曲線の局面においてその支配的なものを交代するのと同じく、歴史的な流れのもとで変遷する。ここに我々は「承認の歴史哲学」というべきものを見ることができのかもしれない。しかしまた同時に、社会的性格が理念型と言われたのと同じように、これらの三タイプの承認も理念型だと言うことができる。つまり、我々人間の心のなかには、これら三タイプの承認を求める欲求が動いているということになる。そこで次に、

恥と罪と不安という概念を手がかりにしてこれら三タイプの承認についてさらに詳しく見てみよう。

### 3 恥・罪・不安

「恥ずかしい」という感情がある。『創世記』には、最初裸でも互いに恥じなかったアダムとエバが、知恵の実を食べて一気に知恵づくとともに、お互いに恥じて、恥部を隠したという物語があるが、これが象徴的に示す通り、知恵づくことと恥ずかしさとは期を一にしている<sup>15</sup>。最近の社会心理学でも、羞恥の発達について次のような議論がある<sup>16</sup>。すなわち、我々人間は一定の生得的な感情（驚きや興味、喜び、恐怖や嫌悪）を持って生まれてくる。さらに一歳半から二歳にかけて新たな感情（嫉妬や共感、そして羞恥 embarrassment）を獲得する。そのきっかけが自己の発見であるとされる。二歳児は初めて自分という人間がこの世界に存在することを知り、そしてその自分と他者との関係についていくつかの新しい感情を持つようになるというのである。さらに、この後、社会的なルールや規範の学習をきっかけに感情の種類がさらに増加する。学習した社会規範に基づいて自分自身を内省的に評価できるようになるからである。その結果としてプライド、罪の意識、恥の意識（shame）などの感情が芽生えてくる。この議論において重要な点は、自己認知や規範の認知という知的な要素の発達とともに、羞恥や恥の意識、そして罪の意識のような感情が生じているということである。

いま、羞恥と恥とが区別されていたが、shame（恥）は、道徳的な意味合いを含んだかなり強い感情を意味し、embarrassment（羞恥）の方は、もっと日常的な恥ずかしさ・きまりわるさを意味する。したがって、前者は規範の認知という要素を必要とするのである。リースマンが伝統指向型の「恥」で考えているのもまさにこの意味であろう。また、ルース・ベネディクトが『菊と刀』<sup>17</sup>で欧米文化の「罪の文化」に対比して日本文化を「恥の文化」と規定したときの「恥」もこの意味である。二つの文化はこの著作では次のように対比される。「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのに対して、真の恥の文化は外面的な強制力にもとづいて善行を行う。恥は他人の批評に対する反応である。人は人前で嘲笑され、拒否されるか、あるいは嘲笑されたと思いこむことによって恥を感じる。いずれの場合においても、恥は強力な強制力となる。ただし、恥を感じるためには、実際にその場に他人がいあわせるか、あるいは少なくとも



も、いあわせると思いこむことが必要である」(CS.223)。この叙述を見ると、ベネディクトの描く日本人は他人指向型のように見えるが、そうではない。ここでの他人は、日本の伝統的行動様式を身につけて、その規範に基づいて、批評するひとである。「恥は徳の根本である、と彼らは言う。恥を感じやすい人間こそ、善行のあらゆる掟を実行する人である。＜恥を知る人＞という言葉は、ある時は、virtuous man (有徳の人)、ある時は、man of honor (名誉を重んずる人)と訳される」(CS.224)。これからも分かるように、恥の意識は、外的な社会的規範に基づいて、個人に善行を行わせる道徳的規準として機能しているのである。承認の問題からいえば、ひとがその外的な社会的規範にそわない行動をとって、他者から承認されないときに生じてくる意識とすることができる。他方、罪の意識の方はどうであろうか。「名誉ということが、自ら心中に描いた理想的な自我にふさわしいように行動することを意味する国においては、人は自分の非行を誰一人知る者がいなくても罪の意識に悩む。そして彼の罪悪感には罪を告白することによって軽減される」(CS.223)。恥との対比で言えば、ひとが幼少のときに身につけた内的規範(「超自我」)にそわない行動をとったとき、他者から認められる・認められないからはまったく独立に、自分でそれを承認できないときに生じてくる意識とすることができよう。前者が共同体による承認であるのに対して、後者は自己承認である。

もし恥と罪をこのように承認の規準という点から考えることができるのだとするならば、リースマンが「他人指向型」に付随するとする「不安」とはどのような感情なのだろうか。現代が「他人指向型」が支配しはじめている時代であるとする、この「不安」こそ、今日主流の感情ということになる。そこで次に「対人不安」と呼ばれるものを取り上げてみたい。リースマンの「不安」も人間社会のなかで生まれてくるのであるから、対人不安である。

社会心理学においては、この「対人不安」のもとに大きく二つの下位のカテゴリーが含まれている。(I)「羞恥の意識」と(II)「コミュニケーション不安」である。前者はすでに述べたembarrassmentであるが、この中には(I-a)「ハジ」とともに(I-b)「テレ」も含まれている。他方後者の「コミュニケーション不安」の方は(II-a)「対人緊張」と(II-b)「対人困惑」が含まれている<sup>18</sup>。リースマンが「他人指向型」において考えている同輩集団のなかでの承認不全で生じる感情もこれらに含まれているように思われる。そこで、これらについて詳しく見てみよう。

これらの感情はどういう対人場面において生じてくるのか、まずその事例をみてみた

い。(I-a) ハジは、何か失敗をしたり、勘違いしたり、知られたくない秘密を知られたりというように自らの振る舞いが他人の目にさらされたときに生じるが、他人から嘲笑・批判・軽蔑というような否定的評価を受けた場合にも引き起こされる。(I-b) テレは、逆に他人から肯定的評価を受けた場合に生じるが、単になにか賞をもらったというだけでは生じてこない。そのことが他人に公表された結果生じてくる。また、誰もが経験することであるが、誕生パーティでみんなにお祝いの歌を歌ってもらった場合などにも生じる。(II-a) 緊張は、人前であがるというのが典型例であろう。(II-b) 困惑の方は、たとえば、顔見知りと久しぶりに会って話していて話題が尽きてしまったという場合に生じる<sup>19</sup>。

では、それらの強さについてはどのようなことが言えるだろうか。最近の社会心理学においては「対人不安」の説明として「自己呈示理論」と呼ばれるものが用いられる。我々は毎日の人間関係の中で他者に何らかの印象（頭がいい、礼儀正しい、明るい、積極的、かわいらしい、厳しい、怖そう、等々）を与えたいと思い、相手や場面に応じてさまざまな自己を演じる。外見を装い、言葉や話題を選び、振る舞いに注意する。これが自己呈示である<sup>20</sup>。もちろん、人間のふるまいや行為は通常、本人の信念や内面の葛藤の表現というふうに理解できるが、それを、他者に好ましい印象を与えるための意識的・無意識的戦略あるいは演技として理解してみるとこの理論の特色がある。こうしたとき、対人不安の強さ（SA）は、他者に対して望ましい印象を与えようとする動機づけの強さという要因（M）と望ましい印象を与えることができる確率の高さという要因（p）によって左右されると考えることができる。この要因Mは、承認欲求の強さと言い換えてもよいかもしれない。数式で表すと次の式で表現される。

$$SA=f[M \times (1-p)]$$

具体的に言えば、よい印象を与えることに成功したいという気持ち・承認欲求が強い場合や、与えることに失敗する可能性が高い場合、あるいは両者が重なればなおのこと、「対人不安」が強まるのである。逆にいえば、承認欲求が弱く、よい印象を与えることに特にこだわらない場合、成功する可能性が高い場合には、不安は小さいのである<sup>21</sup>。

しかし、対人不安という感情はどのようにして起こってくるのだろうか。社会心理学の見地に立つと、まず他者への印象を気遣う自己呈示の機能として次の三つのものが考えられている。(A) 自尊心を維持するために、他者から望ましい評価が得られるように自分の印象を気遣うという機能。(B) 我々は他者の行動からさまざまな利益・不利益を

得るが、他者から有利な反応を引き出すために自己の印象を気遣うという機能。(C) 自己のアイデンティティーが混乱しないように、それに合致した印象を他者に抱かせようとする機能。これら三つである。そうだとすると、対人不安は、これら三つの機能不全によって生じてくると言うことができる。

例えば、「対人不安」のなかの (I-a) 「ハジ」をとりあげてみよう。他者から否定的評価が投げかけられた場合のこの感情の生成のメカニズムについては次のような考え方が可能である。(A) の機能からすると、他人から否定的な評価をうけ、それを自分も認めたがゆえに、自己イメージ（自己評価）が低下して恥ずかしいという感情が起こったとすることができる。「ハジ」とはプライドや自尊心が傷つくことへの不安ということになる。また、(B) からすると、他人から否定的な評価をうけ、その人との間の関係が壊れそうになっていることへの不安が恥ずかしいという感情として現れてきているとすることができる。この場合「ハジ」という感情は、いわば他人から拒否され人間関係が壊れそうになっていることを知らせる警報と見なせるであろう。これは、「顔がつぶれる」「合わせる顔がない」「面子がつぶれる」「面目ない」とも言い直せそうな事態である。この顔や面とは、「顔を立てる」「体面を保つ」「面目をほどこす」という場合のような、世間を前にして維持すべき社会的自己イメージ（世間に示していれば有利であるような自己イメージ。世間体・体裁という言葉もある）のことを意味する。これが壊れかけることへの危機感が「ハジ」という感情を生むというわけである<sup>22</sup>。さらに、(C) からすると、恥ずかしいという感情は、自分に関する自他の認識のずれによって引き起こされると考えることができる。自分は自分で自己イメージをもっているが、このイメージを他人に承認してもらうことで、自己イメージの正しさの確証を受けるということができる。しかし、自己呈示に失敗して、他人が自分について異なるイメージを抱いていた場合、そこにズレが生じて、自分の自己イメージが揺らいでしまうことになる。この混乱への警報装置が「ハジ」の感情と考えられるのである。また、これに類する考え方として、社会集団の役割構造に着目するゴッフマンの社会学に由来する考え方もある。自己イメージの混乱というよりも、社会集団のなかで自分が果たすべく他人から期待された役割を自分がうまく果たせないとき、あるいはそれと矛盾する行為をしてしまったときに生じる一種の困惑感を「ハジ」の感情と考えようというものである。

以上、自己呈示のもつ三つの機能の点から (I-a) 「ハジ」のメカニズムを見てみたが、これら三機能のどれか一つに「ハジ」という感情の説明を帰着させることはできないよ

うに思われる。そこで以上の議論を基にすると、「ハジ」のメカニズムについて次のように考えられよう。だれもが一定の自己イメージを抱いている。このなかには、自己の能力の評価、社会的自己イメージなどが含まれている<sup>23</sup>。これがいささかでも高いことが「自尊心」と呼ばれる。それに基づいて、あるいは他者関係を鑑みながら、自分の一定の役割を果たそうとする（そこには身体的限界もあって、自己のイメージとのズレが生じ、それが自己評価の低下を招くこともある）。しかし、それが、他者が期待するものとは異なっていれば、その他者からは否定的評価が投げかけられる。それが正当なものだと自分が考えれば、自己評価は低下するし、自分の「顔」がつぶれたようにも感じる。他人が自分に関してもっている「イメージ」も自分のそれとズレているように感じられ、とまどわざるをえない。大略このようなメカニズムを考えることができよう。このメカニズムは、みずから人前で失態を犯したときにも使える。また、(I-b)「テレ」の場合は、これと逆の肯定的評価を考えればいいであろう。また、(II-a) 対人緊張の場合は、他者が自分に期待している場面で、自己の能力に対する評価の低さ、つまり、自信のなさが緊張を招いている。(II-b) 困惑の場合も他者とのコミュニケーションの中で、自分がいまどのような言動をとればいいのか、自分の役割が混乱している場面で生じると言える。いずれも、自己イメージと他者が自分についてもつイメージとの力動的関係がさまざまな「対人不安」を引き起こしていると言うことができる。

では、このような不安と本章の最初に述べた恥や罪とはどこが異なるだろうか。恥の場合、外的な社会的規範が存在し、それをもとに自己呈示が共同体によって評価される。罪の場合は、幼少のとき家庭で植え付けられた内的規範が存在し、それをもとに自己呈示が自己評価される。ところが、不安の場合は、自己呈示が測られるべき明瞭な規準は存在しない。したがって、リースマンの言うところの「レーダー」を使って常に他者が期待するもの、あるいは、他者が投げかける評価に敏感に反応することが必要になるのである。では、リースマンは、これらの承認の形や社会的性格のうち、いずれを高く評価するのであろうか。それを次に見てみたい。

## 4 他人指向と自律

これまでリースマンの著書『孤独な群衆』を承認論の立場から読み直そうとしてきた。以上の議論からすると、「伝統指向型」は古くさい因習にとらわれた恥をかくことを恐れ

る体面にとらわれた人間、他方「他人指向型」は底が浅く、他人の評価に振り回される風見鶏のようであり、これに対して「内部指向型」が勤勉実直、他人に振り回されないでしっかりと自分を保っている好ましいタイプに映るかもしれない。しかし、彼はこのような評価を加えることを警戒する（LC.159を参照）。そして、「他人指向型」が具えている積極面、すなわち、他人を考慮する感受性、思いやり、寛容さ、柔軟性さ、解放性というものを強調する。だが、彼は「他人指向型」を礼賛しようというのではない。彼はこの著書の第三部「自律 autonomy」で新たな三分区を持ち込む。「適応型 the adjusted」「アノミー型 the anomic」「自律型 the autonomous」である。それらについてまず見てみる。

「適応型」とは、その時代の社会的性格にうまく適応しているタイプのことを言う。伝統指向型が支配している時代の典型的な伝統指向型の人間、内部指向型が支配している時代の典型的な内部指向型の人間、他人指向型が支配している時代の典型的な他人指向型の人間、これらを適応型と呼ぶのである。彼らは「適応にあたってはあまり努力を要しない」（LC.242）という特徴があると言われる。これと正反対なのが「アノミー型」である。実質的には「不適応型」であり、「社会の行動面での規範に同調する能力を欠いている」（LC.242）のがこのタイプである。「アノミー型」の中にはいろいろな種類がある。(i) 伝統指向型の社会で、逸脱者のために用意してある役割すら果たすことのできない人々。無法者型。(ii) かつては適応していたのに、新しい社会的性格が台頭してきて、不適応になってしまった人々。たとえば、伝統指向型に生まれ育った人は、内部指向型の社会では不適応になり、他人指向型社会になると、内部指向型に生まれ育った人も、アノミー型になっていく。(iii) 適応過剰の人々。「自分の内側、および外側から与えられる信号に対してあまりに熱心でありすぎるような人間」（LC.244）。たとえば、内部指向型社会の適応過剰人間は、あまりにも厳格な「超自我」によって自分自身をコントロールしているから、自分の仲間たちのごくあたりまえな満足だの、逃避だのをさえ赦そうとしない人々である。また、他人指向型社会の適応過剰人間も問題的である。他人指向型の支配的な人間は、他人に寛容であろうとするあまり、感情をおさえすぎて、極端までいくと、感情生活が死んだものになってしまう。これらとは異なるタイプが「自律型」である。「その社会の行動面での規範に同調する能力をもちながら、それに同情するか、しないか、に関して選択の自由をもっているような人間」（LC.242）のことを言う。伝統指向型社会では、選択の自由の意識をもつことは難しい。内部指向型社会の自

律型は、自分で自分の目標を選び、ジャイロスコープのスピードを自分で調節できる人で、社会的・政治的権威を受け入れるにあたってもつねに条件つきの態度をとるタイプの人間と言われる。そして、最後の他人指向型社会の自律型、これをリースマンは待望している。「私はレジャーだの、人間的な同情だの、物質的な豊かさだのの新しい可能性を拒否するのではなく、むしろそれを受け入れるような新しい社会について展望を開いてみたかったのだ。(中略) 他人指向型社会に希望を託しうるとするならば、それは内部指向型ではなく、自律性である」(LC.160)。

しかし、そのような可能性の実現をしぼませる障害がいくつかある、とリースマンは言う。その障害を彼は仕事と遊びの双方の領域に見いだす。仕事の領域における自律性の障害を彼は「偽りの人格化false personalization」と呼ぶ。これはつまり、職場の人間関係が人格化（人間化）し、その成員それぞれがお互いに魅力的でなければならないような社交の場と化していることを言う。職場における「社交性の過剰現象」(LC.277)である。本来自律性を増進させるために使われるはずのエネルギーがそのため、職場の中に吸収され、枯渇しているのである。また、遊びの領域における自律性への障害は「強制的な私生活化enforced privatization」と言われる。「私生活化とは人間を友情だの、レジャーへの機会から切り離す経済的、人種的、家族的なさまざまな制限一般をさす言葉である」(LC.264)。人は、自分の属する社会階層（これは収入や人種によって決まってくる）の中で同輩集団を形成する。同じ集団と社交している限り、自分の中に眠っている可能性はそのままである。「新しい友人たちや、新しい、ないしは従来のそれとは多少ちがった仲間集団」(LC.278)と社交することができれば、自分の潜在的な可能性を引き出すことができる。しかしながら、これらの障害がのぞかれたとしても（これ自体困難なことであるが）、人間は何によって自律性を獲得することができるのか、すなわち、自律性にいたる方法についてはその困難さをリースマンは語るだけで、積極的には何も語らないままに終わっている(LC.304)<sup>24</sup>。彼が『孤独な群衆』を書いて半世紀近く経っている。彼がアメリカの上層中産階級において起こりつつあることとして記述した「他人指向型」の台頭は、今日現実のものとなっているように思われる。その現れが、たとえば、小論の冒頭で述べた最近の若者の「承認願望」の強さであろう。しかし、彼が待望する、より自律的な社会的性格の萌芽はまだ見えないように思われる。

さて、ここで最初の問題意識にもどろう。小論の最初で、承認と戦いと密接な関係について述べた。そして、承認の様相の変遷を論じるために、歴史的観点をもちこみ、

リースマンに従いながら、いわば「承認の歴史哲学」を描いてみた。そこで、これまでの記述をふまえて、承認の三種類のタイプを私なりに再構成し、戦いとの関係を探ってみたい。

(1) 我々の日常生活には基本的なレベルで、自分の属する共同体（家族、ご近所、同輩関係、学校、職場など）による承認の働きが組み込まれている。ただ普通は、承認がスムーズになされているから、あまりその働きを意識することがない。幼年期から我々は自分の属する共同体のなかで一定の役割を果たすように刷り込まれ、その社会的規範を身につけるので、それを意識せずに自然と果たすようになっている<sup>25</sup>。相手は、自分がその社会的規範通りに振る舞うことを期待するので、自分もそれを果たそうと自己呈示する。果たせないときに「恥」の意識が生じてくる。また、その社会規範に照らして、規準をみたしていれば、賞賛をうける。このような形での承認には戦いの要素は希薄である<sup>26</sup>。

(2) 自己承認は、これと異なり、内面での承認である。自己の価値を自分が承認するのである。しかしその場合も、自分の現にある姿とあるべき姿との比較がなされなければならない。自己検討・自己評価である。このときの規準は、その人において内在化している尺度である。しかしながら、この自己評価は不快な感情を引き起こす場合が多い。なぜなら、人間の理想追求は上昇指向が強いので、現実の自己が規準に達していない場合（社会心理学のいう「負の不一致」）の方が圧倒的に多いからである。そのとき、その人は自分が規準に達していないことに気づき、自己卑下、自己非難の不快な感情を体験することになるのである。これが「罪」の意識となって現れてくる。このとき人はどうするか。自分から意識を外の世界へ逸らす（「注意転化」「回避」）か、現実の自分を規準に近づけようと努力する（「不一致低減」「規準適合」）かである。しかし、もし、現実の自分が規準を越えている場合（「正の不一致」）はどうか。社会心理学は、たしかに一時的には喜びや自己高揚感をもたらすが、同時に規準が上昇するので、それはふたたび負の不一致に転ずると予想している<sup>27</sup>。ここには、他人との競争という面もあるが、まず第一に、自分との戦いがある。しかも、それは、敵を屈服させることのできない、いつまでも続く戦いである。

(3) 他者による承認。規準がはっきりと見えない承認の形である。したがって、他者との、目隠しされたままの手探りの交渉においてその承認を求めることになる。第三章で述べたように、自己イメージと他者による自己イメージ（他者の期待）との力動的関

係から承認がうまれたりうまれなかったりする。このような自他の関係をリースマンは「敵対的協力 antagonistic cooperation」と呼んでいる。「現代社会にあっては、競争的エネルギーは同輩集団からの承認を得ようとする不定形な安全確保のための競争につかわれているように見える。しかも、その競争というのは、承認を得るための競争である。そして、この競争はその性質からして、あからさまに競争的であってはならない。こういうわけで私は＜敵対的協力＞という言葉がこうした事態を説明するのに適切であると考え」（LC.81）。この競争が「あからさま」でないというのは、競争している者たちが、「自分たちが競争しているのか、どうかさえわからない」（LC.101）でいるということに表れている。しかも、彼らは、「この敵対的協力者から、価値、そして価値判断を学びとるのである」（LC.137-138）という仕方では他者と協力しあいながら競争するのである。現代の承認をめぐる戦いの姿の特異性がここに集約されているように思われる。最近強くなっているとされる承認欲求が戦いという面をおもてだして見せないというのも、このような理由からだと言えるであろう。

## むすび

リースマンの師であるE.フロムはその著『自由からの逃走』で次のように書いている。「敵意にみちた世界のなかで、孤独となった個人の状態からでてくるこのかくれた不安は（中略）ルネサンス時代の個人に特徴的な性格（すなわち、名誉を求めるはげしい願望）の発生を説明している。それは少なくとも、中世的社会機構のなかの人々には、それほど強くみられなかったものである。人生の意味が疑わしくなり、他人に対する関係、また自分自身に対する関係が、安定感を与えなくなると、そのときこそ名誉が疑いを沈黙させる一つ的手段となる。（中略）その時代の人々に名前が知られ、それが数世紀にわたって語りつたえられると期待できるならば、その人間の生涯は、他人の判断のなかにまさにある反響をもたらすことによって、はじめて意味と価値とを獲得する」<sup>28</sup>。フロムが典拠としているブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』も個人の発展ということで「近代的名声」について語っている。しかし、このような剥き出しの名誉欲は、ルネサンス期のイタリアはともかくとして、近代や現代にそのままのかたちでは成り立たない。

「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる」という『聖書』の言



葉にもあるように、キリスト教の支配したヨーロッパ中世では、「鼻で息をするだけの者」（「イザヤ書」）である人間に価値を置くことは、おごり・高慢とされ、唯一の価値たる神を蔑ろにすることとされた。『旧約聖書』の外典の一つ「シラ書」（キリスト教では「集会の書」として知られる）には、「高慢の初めは、主から離れること、人の心がその造り主から離れることである。高慢の初めは、罪である。」とあるが、そもそもアダムとエバが神の命令をやぶったのも彼らには高慢という「悪しき意志」が芽生えていたからだとされる<sup>29</sup>。従って、人間の傲慢さを否定するキリスト教を経験したヨーロッパ近代においては、素朴な名誉欲は成り立たず、そこには屈折が入りこむ。M.ヴェーバーが論じたプロテスタンティズムの禁欲的倫理に典型的に示される内部指向型の人間は、その屈折の現れであろう。勝利を得ようと競争し戦いながら、勝っても素直に喜べない近代人の心のあり方がそこに示されている。名誉欲を剥き出しにして、勝てば名誉を得たとして心を安じるという人間のあり方は、内部指向型には無縁である。

しかし、現代において事態はさらに進行している。現代人は、名誉を求めない。他人から抜きん出て目立つことを恐れる。趣味の規準を敵から学びながら、同時に規準をめぐってその敵と見えない競争をする。本来自分や相手の自己イメージを高め、癒しの働きを含んでいるはずの承認は今や、我々に癒しをもたらすどころか、我々を不安にさらし、見えない戦いのただ中に巻き込んでいる。この戦いから超越するところに、リースマンが待望する「自律型」という新しい社会的性格の特徴はあるのだろうが、まだその片鱗すら我々は認めることができない。

---

1 An Intermediate Greek-English Lexicon founded upon the seventh edition of Liddell & Scott's Greek-English Lexicon, Oxford UP, 1980. p.116.

2 「アレテー (aretē) という言葉は、後に徳 (virtue) と翻訳されるようになるが、ホメロスの叙事詩においては、あらゆる種類の卓越性 (excellence) を表すために用いられている。例えば、足の速い走者は彼の足のアレテーをはっきり、またある息子はあらゆる種類のアレテーの点で（競技者として、兵士として、そして頭脳の点で）父親に勝ると語られる。徳あるいは卓越性についてのこの概念は、私たちに与っては、最初に認識しがちであるよりも異質なものである。」マッキンタイア『美徳なき時代』（篠崎榮訳・みすず書房・1993年）150頁。

3 「「戦士」と「英雄」は同義語であり、戦士文化の主要テーマは二つの基調（武勇と名誉）の上に築かれている。前者は英雄の本質的属性であり、後者はその本質的目的である。価値、判断、行為、技量と才能はどれもみな、名誉を明示するかあるいは名誉を実現するか、いずれかの機能を有している。」

フィンリー『オデュッセウスの世界』（下田立行訳・岩波書店・1994年）216頁。これはラテン語でも同様に、英語の virtue の語源であるラテン語の virtus は「男らしさ」「勇気」をしめす。

4 プラトン『ソクラテスの弁明』29d5-30b5。

5 プラトン『国家』580d10-581a1、440e10-441a3。『パイドロス』253d4-8 でも魂の気概に相当する「善い馬」は「名誉の愛好者」とされる。

6 これについては拙論「承認と自意識」（京都大学文学部哲学研究室紀要『PROSPECTUS』No.5・2002年12月1日刊行に収録）のなかで触れた。

7 『朝日新聞』（京都版）2003年10月22日付朝刊の＜自分史づくり・授業で確認「私の居場所」＞という記事を参照。

8 たとえば、かのアウグスティヌスでも『告白』第十卷第三十六章-第三十九章で、自らに潜む「賞賛されたい誘惑」について語っている。

9 小論は前掲の拙論「承認と自意識」に対してなされた批評に触発されて、承認の原理的問題に再度踏み込もうとするものである。本来なら各論に進むべきであるが、まだ原理的問題について未熟な点が多いことに気づかされた。批評を寄せてくださった方々に感謝したい。

10 D.Riesman with N.Glazer and R.Denney: The Lonely Crowd, Yale UP, 2001. 小論ではLCと数字でこの版での参照箇所を略記する。原著は1950年であるが、1961年に序文つきの簡約版がでている。さらにこの版には、1969年の第二序文他が付け加えられている。引用は、リースマン『孤独な群衆』（加藤秀俊訳・みすず書房・1964年）によっているが、筆者の考えて訳文を変更しているところもある。

11 この三区分別についていくつかコメントしておく。（1）このような三段階は、西欧社会、あるいは日本を含めた西欧化された社会に広く見られるものである。西欧化されない社会は、まだ高度成長潜在的な段階に留まっていると言うことができる。（2）説明にとりあげたのは、中世から現代にいたるまでの西欧近代文明の流れであるが、この三段階は、古代ヘブライ、ギリシア、ローマなどの文明において小規模なかたちで繰り返して現れていると言うことができる。リースマンは古代ギリシアの都市国家アテナイをその一例にあげてその流れを叙述している（LC.25以下を参照）。（3）人類の歴史全体でみた場合、初期の人口減退の段階以降、人口がどのように変わるか、まだ見通しがつかないとされている。

（4）このような三段階はまた産業構造の変化に対応するとされる。高度成長潜在的な段階の社会では第一次部門（農業・狩猟・鉱業）が、過渡的成長の段階にある社会では第二次部門（工業）が、そして、初期の人口減退の段階にある社会では第三次部門の産業（商業・コミュニケーション・サービス）が支配的である。

12 両者の間にどうしてこのような対応関係が成り立つのか。その因果関係はどのようなものか。このような問題に普通であれば注意が向けられるかもしれないが、これはリースマンの関心外である。だが、彼は、厳密な因果関係の問題には深く踏み込んでいくことはしないが、その両者を媒介するものとして「性格形成のための人間的要因」が介在していることを指摘し、それを詳論している。その要因とは、具体的にいえば、「両親、学校の教師、同輩集団の仲間たち、そして彼らに物語を供給する人々」である。彼らは、「社会的遺産を伝える役割をうけもっており、彼らは子供たちの人生、そしてとりまなおさず、社会全体に大きな影響力をもっている」（LC.37）とされる。

13 内部指向型は、宗教的な所属を問わずに適用される理念型であるにもかかわらず（LC.14-15を参照）、リースマンの内部指向型に関する議論は、M.ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を強く意識しているように思われる。

14 この問題については別の視点から拙論「カーシェアリング社会の可能性」（京都大学哲学研究室紀要『PROSPECTUS』No.6・2003年12月1日刊行に収録）で触れた。

15 ダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』（1959年・1966年）は、この現代版というべきであろう。主人公のチャーリーは、愚鈍であるが、手術によって一気に知恵づき、天才となる。その結果、いままで気づかなかったことを知るようになる。アダムとエバの物語とこの小説との類比は、筆者自身によって保証されている。邦訳（小尾芙佐訳・早川書房・1999年）181-2頁のファニー・バードンの言葉を参照。

16 この箇所および本章の記述は、次の書物に負うところが大きい。菅原健介『セレクション社会心理学 19・人はなぜ恥ずかしがるのか―羞恥と自己イメージの社会心理学』（サイエンス社・1998年）。

17 Ruth Benedict: *The chrysanthemum and the sword -- Patterns of Japanese culture*, Boston 1989. 小論ではCSと数字でこの版での参照箇所を略記する。

18 それぞれの感情は、次のような言葉で表現される。(I-a)「ハジ」:「恥ずかしい、赤っ恥をかく、恥じる」。(I-b)「テレ」:「照れる、気恥ずかしい、はにかむ、おもはゆい」。(II-a)「対人緊張」:「緊張する、気後れする、あがる、かたくなる」。(II-b)「対人困惑」:「気まずい、気詰まり、ばつが悪い、きまり悪い」。

19 羞恥の意識とコミュニケーション不安との違いについて、前者は起こってしまった結果への反応であるが、後者はこれから起こること、いま進行中のことへの反応であるという点をさしあたりあげることができるだろう。多くの場合この違いが成り立つと思われるが、しかし、「テレ」の場合、お祝いされるときは進行中でもテレを感じており、この違いは不成立となる。

20 「個人には、他者の前にでるとき、その他者が状況から受ける印象を、統制しようとする動機がいろいろある、と私は考えている」。このような関心のもとで、印象を保持するための手段（演出技術、舞台操作等々）について論じているのが社会学者ゴッフマンである。Erving Goffman: *The presentation of self in everyday life*. Anchor Books. 1959. p15. ゴッフマンの社会学からは承認論のためにくみ取るものが多いように思われる。

21 この議論は特に「対人緊張」にはよくあてはまりそうであるが、羞恥の意識の場合はどうであろうか。「ハジ」の場合、たとえば、道でころんで恥ずかしい思いをするのと、劇の舞台の上で演技中にころんでしまって恥ずかしい思いをするのでは、その「ハジ」の強さは異なる。それは、よく見られたいという気持ち・動機づけの強さにやはり比例するであろうが、現に失敗が起きているのであるから、よい印象を与える可能性である  $p$  は0になり、SAは実質的には変数がMだけの関数になってしまう。

22 「面目という概念を定義づけるなら、ある特定の出会いのさい、ある人が打ち出した方針、その人が打ち出したものと他人たちが想定する方針にそって、その人が自分自身に要求する積極的な社会的価値、ということになろう。面目とは、認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自己をめぐる心象（イメージ）である」。Erving Goffman: *Interaction ritual*, Pantheon Books 1982. p.5. 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為』（法政大学出版局・2002年）5頁。この論文集の第一論文は、面目（face）について論じている。

23 高田利武『セレクション社会心理学3・他人と比べる自分』（サイエンス社・1992年・83-86頁）によれば、最近の社会心理学では、自分自身に気づく「自己過程」には四つの位相があるとされる。1「自己の姿への注目」（自分のことが気になる段階）、2「自己の姿の把握」（自分の姿の特徴を自分なりに描いて、自分を概念化する段階）、3「自己の姿の評価」（把握した自分を自分で価値づける段階）、4「自己の姿の表出」（他者との関わりで自分をどう他者に示すか）である。本文であげた点は、おもに2と3に関わる。

24 リースマンは、ジンメルが語るような遊びの領域における自由な「社交性」に期待をかけているように思える。しかし、そこに自律性が育つか疑問が残る。ジンメルの社交サークルの特徴は、「脱所属」と「脱自我」にあるが、自分の属する所属を離れて、自由な場がそこうまれるにしても、個人の主体性は失われる。作田啓一「ロマン主義を越えて—社会学の三つの問題」（『叢書文化の現在 11・歎ばしき学問』岩波書店・1980年に収録）を参照。

25 GH.ミードは社会の規範を身につけるのに、単なるすり込みでなく、幼児が他者の役割を採用する過程の重要性を指摘する。具体的には、ごっこ遊びからはじまり、さらに、規則のあるゲームをする中で子供はいろいろな他者の役割を演じて、そのなかで他者の立場に立つことを学び、社会的自我を形成していくとする。ミード『精神・自我・社会』（稲葉三千男他訳・青木書店・1973年）161頁以下参照。高田利武『セレクション社会心理学3・他人と比べる自分』では、幼児や児童について「自分と他者を比較してそこに類似性を発見することによって、その場でどのようにふるまうべきかについての社会規範を習得したり、他者との緊密な関係をつくりあげたり維持したりする」（48-49頁）というように、規範習得にあたっては「社会的比較」が重要であると言われる。

26 未開社会の場合は、共同体同士の戦いがあり、そこで武勇を示すことが名誉を受ける条件になっている。しかし、そのこと自体が共同体の規範でもある。成員相互の競争意識は僅少であると考えられる。

- 
- 27 押見輝男『セレクション社会心理学2・自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学』（サイエンス社・1992年）15-20頁を参照。  
28 フロム『自由からの逃走』（日高六郎訳・東京創元社・1965年）59頁。  
29 アウグスティヌス『神の国』（服部英次郎訳・岩波書店・1983年）第3巻308頁。

（大学非常勤講師）